令和６年度　社会情報学科
学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　出題の意図

問題文の出典：大塚敦子『動物がくれる力　教育、福祉、そして人生』、
岩波書店、2023 年、44～48 ページ

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

設問 1

1)　設問の趣旨を的確に捉えているか。
2)　課題の在所を把握し適切に絞り込んでいるか。
3)　文章を整然とまとめ上げているか。

設問 2

1)　設問の趣旨を的確に捉えているか。
2)　課題の在所を把握し適切に絞り込んでいるか。
3)　説得力をもって論じているか。
4)　文章を整然とまとめ上げているか。

※　この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和６年度　山形県立米沢女子短期大学　社会情報学科

学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　問題用紙

【問題】次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私が取材したシアトル郊外にあるローズヒル小学校では、週一回、ローバー・プログラム[1]による犬への読み聞かせがおこなわれていました。児童のなかには、英語を母語としない移民の子どもたちや、学習障害などで読書に困難のある子どもたちも多くいました。読み聞かせは犬と子どもが一対一でおこなうので、一度におおぜいの子どもが参加できるわけではありません。当然もっとも必要としている子どもが選ばれるのだろうと思っていましたが、そうではありませんでした。教師たちはただでさえセルフ・エスティーム[2]の低い子どもが、「自分は読むのが下手だから選ばれたんだ」と思わないよう、読書には問題がないけれど、ただ犬に本を読んであげたい、という子どもたちも参加できるようにしていました。

読み聞かせの授業の様子を見ていると、本を犬のほうに向け、ほんとうに犬に向かって読んでいる子が多いのに驚きます。その姿からは、子どもたちが犬に本を読んであげることで大きな満足感を味わい、セルフ・エスティームを高めるのにもつながっていることがうかがえます。そのうち目を閉じて気持ちよさそうに眠ってしまう犬もいますが、子どもたちは気にしません。寝そべっている犬の温かい体に自分ももたれかかり、声を出して読み続けます。

人間のハンドラー[3]の役割も重要です。ハンドラーは犬と子どもの間ではなく、犬側に座り、犬に飼い主がそばにいる安心感を与えるとともに、さりげなく犬と子どものふれあいをサポートします。たとえば、犬のマックに向けて読んでいるうちに子どもが理解できない言葉が出てきたら、「その言葉、マックも初めて聞くと思うよ。どんな意味か、マックに教えてあげて」というふうに話しかけ、いっしょに辞書を引くなどして調べます。もしこのときハンドラーが「この言葉はなんという意味かな？」などと子どもに直接聞いたりしたら、子どもはおそらくプレッシャーを感じてしまうでしょう。それが、犬を介在させ、「犬に教えてあげる」ことによって、子どもは自分が試されているとか押しつけられていると感じずに、学習を続けることができるのです。

（中略）

犬に読み聞かせをすることを読書への動機づけとし、子どもたちの読解力を高める―。こう聞くと、なるほど、それはすばらしいアイデアだ、と思わずうなずきたくなりますが、実際のところ効果はあるのでしょうか。

じつはこのテーマでの研究は、すでに多数あります。明らかな効果は見られないという結論に至った研究もありますが、多くは犬への読み聞かせが子どもたちにさまざまなベネフィットをもたらすことを報告しています。

南アフリカにある大学の心理学部の研究者であるル・ルーたちがおこなった研究では、低所得の人々が暮らす地域の小学校の三年生を対象に、犬に読み聞かせをすることが、読むスピード、正確さ、内容の理解、という三つの項目から成る「読書力」に影響を与えるかどうか検証しています。

まず、ESSI Reading Test[4]により読書が苦手であると判定された102人の児童を、ランダムに三つの実験グループと一つのコントロールグループ（対照群）に分けました。

・犬に読み聞かせをするグループ　27人（犬のハンドラーがそばにいる）
・クマのぬいぐるみに読み聞かせをするグループ　26人（大人がそばにいる）
・大人に対して読み聞かせをするグループ　24人
・コントロールグループ　25人

犬のグループには、読み聞かせの前に犬とふれあう時間がありました。参加した9頭の犬はすべてセラピー犬認定を受けており、ボランティアはR.E.A.D.プログラム[5]の経験を積んでいます。各グループとも、参加児童は週一回20分間、10週間にわたって本の読み聞かせをしました。一方、コントロールグループの児童は読み聞かせには参加せず、普段どおりの学校生活を送りました。

さて、その結果はどうだったかというと、プログラム開始前、終了直後、終了から8週間後の3回に分けて測定したところ、犬に読み聞かせたグループの「内容の理解」 のスコアがプログラム終了直後、8週間後ともに有意に上昇したそうです。

その理由について、研究をおこなったル・ルーらはこう推測しています。穏やかな犬がそばにいることでストレスが低下したこと、犬に無条件に受け入れられたことで、読むのが苦手な子どもたちの読書への抵抗感が減ったこと、そして、抵抗感が減ったことで声を出して読めるようになり、読解力の向上につながったのではないかというものです。ちなみに、読解

力は声に出して読むことで向上するともいわれています。

もう一つ、このようなポジティブな結果につながった要因として、私が素人ながらに思うのは、犬のグループに参加した子どもたちは毎回同じ犬に読み聞かせをしたということです。短時間ではあれ、10週間ある特定の犬に読み聞かせをすることで、子どもたちは犬に対して愛着や絆を感じたのではないでしょうか。この研究での分析対象にはなっていませんが、プログラムが終了したあと、子どもたちは自分の相方だった犬に手紙を書いたそうです。なかには犬の絵を描いた子もいたとのこと。ル・ルーらもそれらの手紙を分析すれば、子どもたちと犬とのかかわりの質についてより深いことがわかるかもしれないと述べていました。

また、セントラル・フロリダ大学のパラダイスの博士論文によると、セラピー犬を相手に読んだ生徒と、先生を相手に読んだ生徒を比べた研究では、セラピー犬相手に読んだ生徒たちはその後より積極的に学業に取り組んだり、教室での活動に参加したりしたということです。

まだ確たるエビデンス[6]はないものの、私たちがなんとなく「これはよさそうだ」と感じる、犬への読み聞かせには、どうやら実際に効果があるといってよさそうです。

（出典　大塚敦子『動物がくれる力　教育、福祉、そして人生』、岩波書店、2023年より一部改変。）

（注）

1 ローバー・プログラム：アメリカ・ワシントン州の図書館司書が始めた、犬への読み聞かせプログラム「リーディング・ウィズ・ローバー」のこと。

2 セルフ・エスティーム：自尊心のこと。

3 ハンドラー：犬の飼い主のこと。

4 ESSI Reading Test：単語リストを読ませて読解力を調べるテストの一種。

5 R.E.A.D.プログラム：1999年にアメリカで始まった、子どもが犬に読み聞かせをするプログラムのこと。

6 エビデンス：証拠のこと。

設問１　下線部について、行われた実験の結果と、ル・ルーたちが推測した結果の理由を150字以上300字以内でまとめなさい。

設問２　人を支える動物の力が活用できる領域には、他にどういったものがあると思うか。具体例を挙げた上で、あなたの考えを700字以上800字以内で述べなさい。